



NHKの次世代戦略

日本放送協会 副会長 ^{いまい}今井 ^{よしのり}義典



1. はじめに

NHKの今井でございます。

私とITUとのかわり、内海善雄氏がITUの事務総局長をされていた時代、2003年と2005年に開かれた世界情報社会サミット (WSIS) に参加したことが始まりです。私は、記者として現場の仕事を長くしてきましたので、技術的なことはほとんど分かりませんでしたし、インターネットの進展を踏まえて、これからの放送・通信の融合時代をどうしたらよいかというような議論については、必ずしも十分な知見を持っておりませんでした。しかし、世界放送連合 (WBU) の一員、アジア大陸の代表として、ICTが発展していく一方で放送の果たす役割も大きいということを理解してもらうために、WSISの議論に参加してまいりました。日本ITU協会の有富理事長をはじめ、ここに御出席の幾人かの方々とも御一緒させていただきました。

本日は、「NHKの次世代戦略」という演題で、昨年10月にまとめましたNHKの2009年度からの3か年計画の中で、今後のデジタル時代、放送と通信の融合時代にNHKがどのような取組をしようとしているのかという点を中心に、御紹介させていただきたいと存じます。

2. 地上放送デジタル化の世界の状況

地上放送のデジタル化は、既に世界の潮流になっています。ヨーロッパではスウェーデン、フィンランド、オランダなど7か国で既にデジタルへの切替えが終わっていますし、ヨーロッパでの20か国を筆頭に、南北アメリカ、アジア、オセアニアなど、世界の約40の国と地域でデジタル放送が始まっています。このほか、試験放送も15か国ほどで始まっています(図1)。

2006年にITUで採択された合意では、2015年までには世界中がデジタル放送に切り替えることになっておりますが、最近の経済危機の状況などを見ると、これがそのとおりに実施されるかどうかは難しいところです。アメリカでは、最近報道されましたようにアナログ放送の終了が当初の2月17日から4か月先送りされて6月12日までということになりました。

た。これには、チューナー用のクーポンを配布するという、景気対策がらみの側面もあるようです。

3. 地上放送デジタル化へのNHKの課題

「地上放送のデジタル化」は、これから3年間のNHKにとって最も重要な課題です。我が国の地上デジタルへの完全移行は、国の政策として2011年7月24日までに進行することが定められています。2009年2月12日現在残すところ892日、これが極めて短い期間であるということは、通信・放送のお仕事にかかわる皆様にはよくお分かりいただけるかと思えます。

NHKは公共放送として視聴者の皆様に混乱なくデジタル放送を御覧いただけるようにしていくために、二つの大きな責務を担っています。一つは送信側の対策、もう一つは受信側の対策です。

送信側の対策として、整備を予定している中継局がおおよそ2200ございます。2009年1月末で全体の3分の1に当たる710の置局が終わりました。局の数としては3分の1ですけれども、世帯カバー率は97%に達しています。全国あまねく受信ができるようにするというNHKの責務を果たすためには、2010年末までに残りの1500の中継局を整備しなければなりませんので、全体の工事日程をどう平準化させていくか、そうした工夫が現在、現場で重ねられているところです。

受信側の対策は、総務省が設置されたテレビ受信者支援センターが中心です。「デジサポ」と呼んでおりますけれども全国51か所で、2月2日から業務を開始しました。NHKから



図1. 地上デジタル放送は世界の潮流



も100人規模の要員を派遣し、各地で受信者支援活動、相談活動を行っています。集合住宅での共聴とか、ビル陰の共聴のデジタル化対応、また町内会などでの説明や相談に答えていくという、きめの細かい活動が必要な段階に入ってきております。

これからの景気の動向も大変気になるところですが、公共放送として、視聴者の皆様が混乱なくデジタル放送を受信できるようにするために、全力で取り組んでまいります。

4. 「NHKオンデマンド」

次のポイントは、「NHKオンデマンド」です。2008年の12月1日からサービスがスタートしました（図2）。

日本が世界に誇れるものの一つに、ブロードバンドの発達があります。品質の良さ、料金の安さは世界トップレベルです。2008年6月現在の総務省の調査では、ブロードバンドの契約者数は3000万に達しています。このようなブロードバンド回線を使って、オンデマンドでNHKのアーカイブにある番組、あるいは毎日放送している番組の中から、もう一度見たい番組や見逃してしまった番組について、配信サービスをするというものです。

「NHKオンデマンド」のキーワードの一つに「高画質」があります。テレビの高機能化やパソコンの発達によって、ハイビジョンの画質で番組が楽しめる時代がやって来ました。お茶の間の大きな42インチ、50インチなどのテレビで、見逃してしまった番組、あるいは過去の名作ドラマやドキュメンタリーなどを、高精細の映像でお楽しみいただけるようになっています。

オンデマンドのサービスが始まってからまだ2か月余りですが、パソコン向けサービスでは、3万人の方に会員にな



図2. 「NHKオンデマンド」2008年12月1日サービス開始

っていただいていますし、番組の購入数も2万5000というところになっております。現在提供している番組は、アーカイブスの番組で1000本余り、また、毎日10～15の番組が放送後1週間程度御覧いただけるようになっていますが、今後は品そろえを一層充実させていく予定です。有料ですが、国民共有の財産として放送の長い歴史の中での成果を、広く皆様に還元させていただきたいと考えています。

5. 「NHKワールドTV」

NHKの海外向け情報発信、テレビ国際放送は、1995年に外国に住んでいる邦人向けに始めたものですが、2008年の放送法の改正により、外国人向けのテレビサービス「NHKワールドTV」と、外国に住んでいる邦人向けのサービス「NHKワールド・プレミアム」の二つに分けて放送することが決められました。

「NHKワールドTV」は、赤い文字と、黒と白のコントラストによるすっきりした画面で構成しています。この放送のねらいは、海外の政治、経済、企業関係者やオピニオンリーダーの方々や、これまで日本に縁のなかった世界中の方々に、日本やアジアの情報を迅速に的確に伝えていくことにあります。アジアの情報はNHKから、「Your Eye on Asia」という、世界に信頼される放送としてのブランドの確立を目指しております。

「NHKワールドTV」は完全な24時間放送です。毎正時30分、英語で日本とアジアのニュースを中心に最新の情報をお伝えしています。後半の30分は日本の伝統文化、食べ物を含むライフスタイルやポップカルチャー、さらにアジアのインサイド情報といったものまで、多彩な内容を発信しております。こうしたニュースと情報番組の1時間のパッケージを四つ組み合わせて4時間を一つのサイクルにし、それを1日6回放送しています。東アジアの情報をこれほど詳しく伝えてくれるところはないという、お褒めのことばなどもいただいております。

「NHKワールドTV」の制作には最新の装置を導入しました。完全なテープレスシステムで、DVDやビデオテープなどは一切使わずに、コンピュータで使われているものと同じハードディスクをたくさん積み込んだサーバーを使って情報を編集し、送出していくというシステムです。

さらに、2009年の末までには、このシステムをもう一段バージョンアップしようと考えております。それはハイビジョン化です。送出装置をハイビジョン用に切り替える工事を始め



ています。これが完成しますと、ニュース・情報番組としては世界で初めて、ハイビジョン放送が24時間流れることになると思います。衛星を使った国際放送は世界に1000チャンネルほどあると言われていますが、その中にはハイビジョンのチャンネルが30ほどあります。しかし、いずれもスポーツとか映画、あるいは自然番組などととどまっております。何とか世界で一番早く、ニュースと情報の番組をハイビジョンでお届けしたいと考えております。

他方、国際放送の課題は、日本で我々が地上デジタル放送あるいは衛星デジタル放送を見ることができるようになり、どうしたら外国の各家庭で簡単にテレビを見られる環境を整えられるかということです。これを私たちは「受信環境整備」という言葉で呼んでいますけれども、世界各地の衛星放送とかケーブルテレビ、それからインターネットを使ったIPTV、そうしたあらゆる手段を活用して「NHKワールドTV」をそのチャンネルの中に加えてもらう。そういう交渉を世界各地で続けております。

これまでに世界の8400万世帯で受信・視聴ができる状態になりました。2008年度末までに、この数字を1億1000万まで増やすということで、最後の努力をしているところです。当面の目標として、5年後には1億5000万世帯ぐらいまで届くようにしたいと思っています。世界的に言いますと、1億5000万世帯から2億5000万世帯ぐらいまでの人々に届けることができないと、主要な国際放送という仲間入りはできませんが、その入口に達しているということを申し上げられると思います。

6. 「いつでも、どこでも、もっと身近に、NHK」

2009年4月からのNHKの3か年経営計画のキャッチフレーズは、「いつでも、どこでも、もっと身近にNHK」ということで、放送のコンテンツ制作力をうまく活用して、テレビ、パソコン、携帯、そのほかにもカーナビ、あるいはDVDなどあらゆるメディアでお客様に情報を御提供していけるようにしていこう、視聴者のメディアに対する接し方の変化を先取りしていこうと考えております。

現在、ホームページ（NHKオンライン）を通じて最新のニュース、気象情報、教育番組、多彩なスポーツ情報、それから最近人気を呼んでおります「チャロ」という英語番組のように、学ぶ意欲を支援する教育コンテンツなどを提供しています。動画を配信している番組のサイト数は3年前には数十サイトしかありませんでしたが、現在は164あります。NHK

オンライン全体へのアクセス数は、平均で1日に800万ページビューに上っています。今後は双方向の情報提供や意見交換など視聴者のメディアに対する新しい接し方にも積極的に対応してまいりたいと思います。

2009年2月2日から、携帯サイトでもNHKニュースの本格的な提供を始めました。7項目の最新ニュースのほか、政治、経済、社会などのニュースを48時間ストックして、携帯で何度でも見ることができるようになっています。地震・津波速報の表示も始めました（図3）。

テレビ放送やホームページ、携帯サイトなどを通じて、「公共の広場」としての役割を果たしてまいりたいと考えております。これから3年間、こうした新しいサービスを展開していくことで、様々な年齢層の視聴者の皆様にとっての利便性を高め、「いつでも、どこでも、もっと身近にNHK」というものを実現していきたいと考えております。

7. 次の世代に向けて

放送本来の分野でも、NHKは次の世代に向けての取組に力を入れています。ハイビジョンは世界各国の放送でも次第に主流になりつつあり、また総務省と一緒に日本方式を何とか世界に広める努力もしているところです。このハイビジョンの誕生は、振り返ってみますと44年前の東京オリンピックが開催された1964年の直後のことでした。カラーテレビ放送がやっと始まった時代ですけれども、NHKでは、将来更に高品質の視聴サービスを目指そうということで研究開発をスタートさせたわけです。

現在、ハイビジョンの次の世代のテレビメディアの研究開発を進めていますが、その一つがスーパーハイビジョンです。スーパーハイビジョンは現在のハイビジョンの16倍の画素数を有する超高精細の映像と、22.2チャンネルの音響を備えて



図3. NHK携帯サイトでニュースをGET



いて、高い臨場感と感動を体験していただける技術です(図4)。また、立体メディアの研究も進めています。日本の放送技術が世界をリードしていく、NHKはその基礎の一面を担ってきたと自負しておりますし、今後も担っていきたいと考えております。

ICTのみならず放送技術におきましても、世界の中での連携が重要なキーワードになっております。スーパーハイビジ

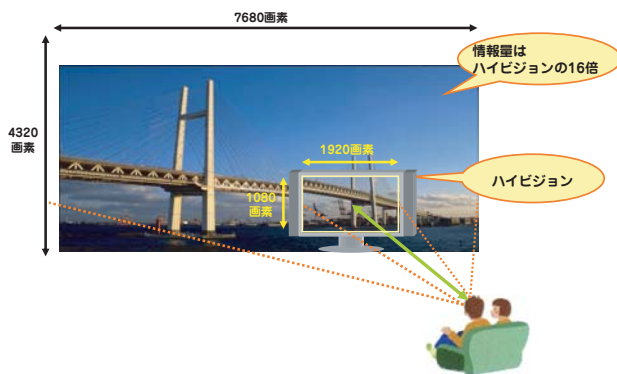


図4. スーパーハイビジョン

ョンなどの研究は、現在、BBCはじめヨーロッパの公共放送の研究機関と相互協力の協定を結び、共同で研究開発を進めています。昨年はアムステルダムIBC、あるいはイタリアのRAIと共同で実験を行うまでに至っておりますが、放送技術の国際化を一層推進してまいりたいと思っております。

8. おわりに

時代は大きく変わってまいります。そして放送を取り巻く環境も、内外ともに大きく変わろうとしており、私たちの前には大変に高いハードルがいくつも控えています。しかし、環境がどのように変わっていかうとも、NHKは視聴者の皆様の身近な存在として、新しい時代にふさわしい公共放送を行ってまいりたいと考えております。

今後とも皆様の御支援を賜りながら前進してまいりたいと考えております。

御清聴いただきまして、ありがとうございました。

(2009年2月12日第372回ITUクラブ講演より)



ITUクラブで講演する筆者